

差別と偏見のない世界へ

村上市立神納中学校 3年 小田 祐奈

差別や偏見はよくない。

そう頭の中では理解できていても、言葉や行動を通して差別や偏見をしないようにするのは難しいことかもしれない。みなさんは、差別や偏見に対してどう思うだろうか。

私は、差別や偏見が嫌いだ。

「喋りたいのに喋れない。」

中学校入学までの私は、「場面緘黙症」という、話す能力は正常であるものの特定の人物や場面でしか話すことができない小児期の子どもに表れる不安障害を抱えていた。自分でも原因がわからなかった。普通に話すことのできている周りのみんなを見ていると「自分だけ何故違うのか。」と不思議で仕方がなかった。不安障害を抱えていることにより、うまく自分の気持ちを話すことができないでいると、周囲から理解してもらえないこともあった。あるいは友達から「喋らないくせに」とわけもわからず八つ当たりされた。「自分はみんなと同じように勉強することも遊ぶことも普通にできるのに『喋らない』というたったそれだけの理由で何故八つ当たりされ、傷つかなければいけないのか。」といった悩みに明け暮れることもあった。

また、小学校で挨拶強調週間をやっていたとき、下校中に近所の大人たちとすれ違った。そのとき、

「小学校、あいさつ強調週間だかやってるのにねえ。」

と、二人で話す声が聞こえてきた。「こっちの事情も何も知らないくせに。あいさつしたくてもできないのに。」小学生ながら、この時ばかりは何歳も年上の大人に怒りがこみ上げた。

こうした体験から私は、その人たちのように偏見をもつなんてことはしないようにしようと思った。

今年になって、こんな出来事があった。廊下を歩いていてある生徒とすれ違ったときのこと。私の後ろのほうでそのすれ違った生徒に対する

「あの子って…。」

というその子の特徴を見下すかのような声が聞こえてきた。その生徒のもつ特性や身体的特徴のことについての偏見から出た言葉であったかどうかはわからないが、私はその一言が頭にきた。

確かに誰にでも他の人と違うところはある。外見が皆違っているように一人ひとりにはその人なりのよいところもある。自分たちがその人のよさやよい面に気付いていないだけで、見えないところでよいところを発揮していることもたくさんあるのだ。だからそんなことへの配慮が足りないまま、「あの子って…。」と言ってしまうのはよくないことだと思う。

ごく普通の付き合いの中でも些細な行き違いから、「あの子はこうだから嫌だ。」「あの子とは関わりたくない。」と口に出して言ってしまうたり、そういう気持ちをもったりすることもある。

人間は感情をもつ生き物である。だから、人に対して様々な感情をもつことは仕方がない。でも、「嫌」ということだけを理由にして「関わらない」という方向に流されていいのだろうか。嫌なところ以上に、よいところを見つけてみてはどうだろう。そうすれば今まで以上に多様な人との充実した関わりが増えるのではないだろうか。

この先、私たちは人生を歩んでいくにつれ、たくさんの人と出会うだろう。自分と気が合わない人や、異なる特性や個性をもった人もいる。そのような人たちに出会っても、「嫌い」や「嫌だ」とか「関わりたくない」というレッテルを貼らず、誰とでも平等に接していきたい。そのためには、嫌なところだけにとらわれず、よいところもたくさん見つけることが大切だ。最初からよいところばかり見つけるのは難しいことかもしれない。でも、偏見を持たないことを意識するだけで、その人のよいところを見つけることは意外と容易にできるものだ。よいところを見つけられるようになれば、その分、人との関わりが増え、その関わりが自分を成長させてくれる。

全世界に70億を超える人がいる中で、今関わり合っている人と巡り合えているという縁はとても貴重だ。だから、自分の世界を豊かにし、より広げていくためにも、差別や偏見をもたずにたくさんの人と積極的に関わり合うことを大切にしていきたいと私は強く思う。